B 102

台湾高砂族の労働着について

九州女大家政　藤弘洋子

目的

台湾の高砂族に着用されていた労働着は、現在の情報化社会、物質文明の流通の中で、すでに多くのものが姿を消していった。

これらの労働着に衣服のルーツを見出すとともに、現在一般の人々に着用されている労働着とのかかわり合いを見出したい。

調査内容

高砂族の中で最も高い文化をもつといわれるアミ族、入墨をし、首狩りの習慣があったといわれるタイヤル族、フィリッピン、バタン島から移り住んだといわれるヤミ族が労働の際着用していたもの（現在ではお祭の時でかみられないものもある。）と現在の労働着を比較した。

結果

1. 樹皮の上衣、下衣、鹿皮の雨衣、麻の袖衣などに類似のルーツがみられる。
2. はだしの習慣の中でも、労働ということから脚と腕の保護意識がみられ、脚絆の種類も多い。
3. 現在の半袖衣は形態的にアミ族、タイヤル族の袖衣に似ているが、労働様式（天秤棒で荷物をかつぐ）によってやや変化してきたものではなかろうか。
4. かぶりものとしては、びんろう、椰子、くるみ、竹の皮などで作ったものがあるが現在では竹の皮で作った斗笠が一般化している。